初めてのアルバイト

大津　隆文

昭和三十年の元旦早朝、中学三年生だった私は年賀状配達のアルバイトのため郵便局へ向かっていた。外はまだ真っ暗で自転車のランプが頼りだった。その時、砂利を踏みしめる大きな音を立てながら、煌々とライトを点けた市営バスが近付いてくる。心細かった気持が救われる思いがした。同時にこんな時間から働いている人がいるのだと、連帯感のような気持がわいてきた。

郵便局で自分が配達する年賀状を受け取ると、自転車がひっくり返りそうな量だった。地理は一週間前から実地練習をしているので大丈夫。配達先で「ご苦労様」と言われると本当に嬉しく、ひと言が持つ力を知った。無事配り終えた時には体中から力が抜けたような気がした。

当初は地理が分からなくて苦労した。田舎なので家は離れているし、今のような地理表示はなかった。日頃担当しているベテラン配達員が郵便物の上に鉛筆で行き方を書いてくれるのだが、それが符丁めいていてよく理解できない。一番嫌だったのは犬だった。当時の犬は番犬としてよく吠える上、大抵玄関先で飼われており、放し飼いの家もあった。怖かった。今も犬が余り好きになれないのはあの後遺症だ。

バイト料の支払いは仕事が終って数日後。弟を誘って受取りに行き、帰り道二人でうどんを食べた。母から「世話になった配達員とお父さんにお礼をしたら」と言われ、ピース（煙草）の箱入りセットを買った。悔やまれるのは母には何もしなかったこと。本当に気の利かない自分だ。残ったお金で父のお古だった腕時計を新調した。

今年も年賀状の季節がやってきた。日本郵便によれば発行予定枚数は十六億四千万枚とのこと。相当な枚数だが、過去のピークに比べれば約三分の一らしい。若者の年賀状離れが進む一方、高齢者の終活の影響もあるという。周りでも年賀状を取り止める人が増えている。

自分もいつまで続けられるか分からないが、少年時代に年賀状配達をした身としては、今しばらく頑張ろうと思っている。